

# 組織目標評価報告書（平成28年度）

部局名：

文学部

部局長名：

金関 猛

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>①-1 目標</b>	<b>①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>①教育の実施体制について 専修コース制から分野制への移行にあわせて指導体制の見直しや各種規定・申し合わせの改訂を行う。アカデミック・アドバイザーによる低年次の指導体制を整備する。状況を見据えながら、WTT制度を活用し女性教員を増やすよう努める。採用人事において外国人教員を任用するように努める。</p> <p>②教育方法・内容について 60分授業・4学期制への移行にあわせて新たな授業形態を模索・試行し、それに関するFD活動を行う。とりわけ初年次教育の方法・内容について、FD委員会を中心に検討し、研修会を開く。教員による授業評価(ピアレビュー)を実施する。専門教育において英語による授業を提供できるよう準備を始める。</p> <p>③教育の成果(学習の成果、卒業後の進路)について 学生対象のさまざまなアンケートを実施、分析し教育効果を明示化するとともに、さらに教育効果を高めるよう努める。</p> <p>④学生支援について 学生生活委員会が中心となって、在学生に対して「文法経学生・院生相談ルーム」の業務を周知するとともに、その利用を呼びかける。また、指導教員制の効果を検証し、運用方法を改善する。</p> <p>⑤国際共同による教育の状況について 外国人学生を語学の教育実習インターンとして受け入れ、新たな語学教育の場を構築する。</p> <p>⑥外国人留学生の受入状況について タスクフォースの求める留学生の受入・派遣目標を達成する。</p> <p>⑦授業改善 教員による授業評価(ピアレビュー)を実施する。</p> <p>⑧その他 優秀な卒論の表彰や卒論の公開などを行い、学生の研究意欲を高める。</p>	<p>①教育の実施体制について 専修コース制から分野制への移行に合わせて卒業要件単位のあり方を大幅に変更するとともに、新入生にその周知を図った。</p> <p>アカデミック・アドバイザーを配置し、相談会を2度開催するとともに、学生からの要望に応じて、新入生の研究室訪問を実施した。また、様式に則った「学修計画書」の提出を年2回義務付け、アカデミック・アドバイザーの継続的な学修支援に生かした。</p> <p>WTT制度による教員の雇用計画に応募し、29年度から女性教員1人を任用することになった。</p> <p>採用人事において、外国籍の教員を任用することになった(29年度から)。</p> <p>②教育方法・内容について 初年次教育において60分授業・4学期制に合わせて、60分×8回完結の授業を数多く実施するとともに、これに関する教員FD研修会を開催した。</p> <p>公開授業を実施し、授業評価を行った。</p> <p>専門学習の基本的知識を習得するための演習を英語による授業として開講した(「心理学演習」)。</p> <p>外国人(アイルランド)の教員を任用し、来年度から英語による授業が実施できるようにした。</p> <p>③教育の成果(学習の成果、卒業後の進路)について 学生生活委員会に就職担当委員を置き、3年生対象の就職説明会を7月と12月に開催した。就職活動に関するアンケートを3年生対象に実施し、その結果をふまえて本年度初めての取り組みとして学生による就職活動懇談会(就職内定学生と3年次生以下の懇談会)を2月に開催した。また、教育の成果を確認するため、「人文学の基礎A」と「専門知と職業」という授業において、それぞれFD委員会、担当教員と共同でアンケートを実施した。学習の成果の客観指標の構築を目指し、ルーブリックに関する研修会を開催した。</p> <p>④学生支援について 「文法経学生・院生相談ルーム」の周知のために、相談員と協力し、新たなポスターを掲示し、また相談ルーム便りを3回作成・掲示した。こうした周知活動より、前年度に比べ相談件数が増加した。1学期と3学期のはじめに修得単位数が基準に満たない学生について指導教員による指導を依頼し、指導報告によって指導教員制によるきめ細かい指導体制が機能していることを確認した。</p> <p>本年度より配置されたアカデミック・アドバイザーによる初年次生の学修支援を行った。様式に則った「学修計画書」の提出を年2回義務付け、アカデミック・アドバイザーの継続的な学修支援に生かした。</p> <p>⑤国際共同による教育の状況について フランス人学生を教育実習インターンとして受け入れ、教育の場を提供するとともに、新たな形態の授業を実施した。</p> <p>⑥外国人留学生の受入、留学生の派遣について JASSOの奨学金に関する説明会を開催し、派遣学生数の増加に努めた。部局プログラムによる派遣数は8人でタスクフォースの目標値に達していない。部局プログラム以外による派遣留学生は5名で、合わせて13名である。部局プログラムによる受入留学生は32人で、前年度より5人増であった。</p> <p>⑦その他 優秀卒業論文賞を設け、優秀な卒業論文を選考し、顕彰した。</p>
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>①-2 大学全体への貢献</b>
<p>卒業時アンケート 入学時アンケート 授業評価アンケート 修得単位にもとづく学生指導(年2回)の状況 相談室利用者状況 外国人インターン受入人数 留学生の派遣、受入人数 教員による授業評価(ピアレビュー)実施結果</p>	<p>60分授業・4学期制を十分に生かすべく、初年次教育のあり方を大きく見直した。また、2年次以上の学生に対しても、インタラクティブ講義という実験的教授方法を複数分野で導入した。これは教員の講義による授業と、チューデント・アシスタントを中心とした授業を組み合わせたものである。こうした新たな授業は全学の教育開発に貢献するものである。</p>
<b>①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>	<b>①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
	<p>①-2に関する別添データを参照してください。</p>
<b>②研究領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>②-1 目標</b>	<b>②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>①研究水準及び研究成果等について 「科研費細目別採択件数」において高い評価が得られるよう努める。研究成果発表の媒体としての文学部紀要、文学部叢書のあり方について検証し、改善する。</p> <p>②研究実施体制等の整備について 文学部大型プロジェクト研究として「21世紀の人文学」を設置し、文学部内外の研究者とともに学際的研究を深化させる。</p> <p>研究費の配分方法を見直し、効率的に研究が展開できるようにする。</p> <p>③国際共同による研究の状況について 「ニホンガク最前線」等の文学部らしい講演会を積極的に実施し、文学部を拠点とした人文科学研究の活性化・国際化を推進する。</p> <p>④外国研究機関における研究従事状況について 海外の研究機関への出張、研修を学部として積極的に支援する。</p> <p>⑤その他 研修会を開くなどして、科研の申請率、獲得率の向上に努める。</p>	<p>①研究水準及び研究成果等について 研究費配分方法を見直し、科研に応募しない場合は、研究費の配分について不利な条件を課すことにした。研究成果をさらに幅広く公開するため、文学部叢書のあり方を見直し、運営費交付金による出版助成によって文学部叢書を出版することにした。</p> <p>②研究実施体制等の整備について 文学部として6つの研究プロジェクトを設置し、研究活動を行うとともに、その成果を発表している。これらのプロジェクトは異分野に属する教員チームによって運営されている。</p> <p>③国際共同による研究の状況について 講演会シリーズ「ニホンガク最前線」の講演会を3回催した。これは海外の日本学研究者にその最新の研究成果を発表してもらうもので、毎回活発な質疑応答がなされた。</p> <p>④外国研究機関における研究従事状況について きわめて多くの教員が海外での研究発表、研究調査に従事している。</p> <p>⑤その他 科研費獲得のための参考書を全教員が閲覧できるようにし、また、教授会で度々科研費応募を呼びかけた。</p>
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-2 大学全体への貢献</b>
<p>「科研費細目別採択件数」における評価 科研の申請率、獲得率 教員の研究成果(著書・学術論文・学会発表等)の公表の状況 国際的な共同研究の状況 文学部プロジェクト「21世紀の人文学」における研究成果の公開の状況 各種講演会の開催状況</p>	<p>海外の研究者を招聘して開催する講演会「ニホンガク最前線」は全国的に見ても稀有な催しである。このシリーズで現在までに11回の講演会を催した。これは総合大学としての岡山大学の人文系存在感を示す貢献となっている。</p>
<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>	<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
	<p>②-2に関する別添データを参照してください。</p>

<b>③社会貢献(診療を含む)領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>③-1 目標</b>	<b>③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>①地域社会との連携、社会貢献について 文学部公開講座を実施する。 研究成果を学外に向けて公開する講演会、シンポジウムを多数開催する。</p> <p>②国際交流・協力について 海外大学との交流協定の拡大と交流活動の実質化に努める。</p>	<p>①地域社会との連携、社会貢献について 文学部公開講座のほか、学外にも公開された講演会等を20回開催した。 岡山大学教育開発センター、岡山県高等学校教育研究会国語部会と共同で、高大連携の一環として、「古典がひらくく知」の扉を開催した。これは新指導要領を見据えた高校での教材開発を岡山大学が支援し、新たな高大接続プログラムを構築する試みである。</p> <p>②国際交流・協力について 部局間、大学間交流協定にもとづく特別聴講学生の増加につとめ、一定の成果をみたほか(16名→24名)、派遣にあたっては、奨学金についての在学生向け説明会を開くとともに、危機管理体制の整備につとめ、安心して留学できる環境の整備をはかった派遣・受入の拡大に努めた。</p>
<b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>③-2 大学全体への貢献</b>
<p>学外者が参加可能な講座、講演会、シンポジウムの開催状況、参加人数。 交流協定の締結・交流活動の状況</p>	<p>年間20回にわたる講演会を企画・実施し、他学部・他研究科の学生や教員のほか、高校生を含む一般の聴衆の幅広い参加を得ることにより、学内外に文学部の教育・研究活動の成果を伝えるとともに、本学と地域社会のつながりを深めることに貢献した。</p>
<b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標の達成状況</b>
	<p>③-2に関する別添データを参照してください。</p>
<b>【総括記述欄】</b>	
<p>60分授業・4学期制に合わせたさまざまな教育改革を実施した。そうしたなかでとりわけ若手教員からの多くの提案を執行部が吸い上げるように努めた。また、部局配分予算の縮小に合わせて学部内の配分方式を一新した。これについては、今後さらに配分方式の改善に努めねばならない。また、教育学部からの心理学担当教員の移籍が決まっているので、来年度以降、公認心理師養成コースの設置について具体的な議論を深化させねばならない。</p>	